

「幼児」

著者	菅，半作
雑誌名	龍南
巻	2 0 1
ページ	4 0 - 4 1
発行年	1927-03-01
その他の言語のタイトル	「 幼児 」
URL	http://hdl.handle.net/2298/8938

「幼
兒」

菅 半 作

古き本を皆とり出して干したれば今本棚の本のとぼしさ（曝書す）

本棚にならびて光る金文字の本は經濟學の本かも

下心さびしき時は本箱ゆ本取り出して讀むなりわれは（病中作）

眼下に見ゆる細瀧白ければ今朝さむくしてこごりたるらし（歸省）

壁道を出づるたまゆら湯氣凝りて窓にむすびぬすがしき露は

山の上の月夜さやけみ向谷の瀧の動きのつばらかに見ゆ

谷川のつめたき水に蟹取ると下駄ぬぎすてゝ子等入りにけり

向山の麓に到る細道とふとわかれたり山腹小路（古閑山にて）

兄の墓

西むきに立ちたる兄の墓見れば前は眞白き蕎麥畠かも

箒にてわが掃きおとす墓の埃りしるくは立たず正午ひるちかみかも

つゝしみて拜する墓のひだり廂のなか香のけむりの立ちこめて見えす

兄の墓の廂につもる古松葉取りて捨てたり弟われは

たはやすく死にし思へばかにかくに墓べの菊も枯れてしまへり

死に行きし人の墓べを歩みつゝひる頃われのひもじくなりたり

かにかくに年はゆくらむ一年のむなしきおもひ胸にわき出づる（除夜）

早朝、郷里阿蘇に歸省して見れば家内にては、朝より幼児むづがり泣きて仕方なし。即ちあはれにおぼえて抱く――

ひさにわが涙拭きやる幼児の二つの頬はひびわれてありぬ

おのが母にゆくと踏みたつ幼児の足のおどろきにけり